

保育者・教育者養成における自己覚知からはじまる 多様性理解と受容

— “カナダにおける多様性と社会公平性ワークショップ” を通した学生の学び —

市川 ヴィヴェカ・上田 征三

Diversity Awareness and Acceptance Through Self-Reflection Activities: Students' Learning from “a Diversity and Equity Workshop” at the University of Toronto

Viveka Ichikawa and Yukumi Ueda

要 旨

他者に対する前向きな好奇心に基づき多様性を理解・受容しようとする姿勢は、子どもの健やかな育ちを支援する保育者・教育者に今後ますます求められていく資質のひとつである。本論文は、多様性理解の出発地点そして基盤として、「己を知る」つまりは社会における自己の在り方を省みるという自己覚知（self-awareness）の有効性に着目したものである。2018年12月に東京未来大学のこども心理学部、東京福祉大学の教育学部での「社会的養護内容」「特別支援教育実習指導」の授業内で行われた「カナダにおける多様性と社会公平性ワークショップ」の学生のフィードバックに焦点をあて、次世代保育者と教育者養成において多様性を経験し語り合う機会の重要性を検討した。その結果、当事者との交流を通じた“経験機会”と養成カリキュラムにおける“学習機会”の両方において、多様性について経験と議論を深める機会の少なさ、しいては多様性を考慮した保育・教育を実践するコンピテンシー（能力）育成の不十分さが把握された。

キーワード：多様性、自己覚知、コンピテンシー、カナダ

1. 背景と目的

本論文は、2018年12月に東京未来大学こども心理学部と東京福祉大学教育学部の学生約120人を対象に「社会的養護内容」「特別支援教育実習指導」のクラス内で実施された「カナダにおける多様性と社会公平性ワークショップ」におけるフィードバックの内容から、日本の次世代保育者と教育者養成における自己覚知に基づいた多様性

理解の学びの機会、しいては多様性を考慮した保育・教育を実践するコンピテンシー育成についての考察を試みたものである。ワークショップ内容はカナダ・トロント大学大学院社会福祉学部「多様性・公平性・学生支援オフィス」においてEnglish as a second Language Speakerプログラムの短期留学生向けに英語で提供されていたワークショップの内容を日本で学ぶ学生に向け翻訳・調整を行ったものである。また、本ワークショッ

プの日本における今回の実践においては、「多様性・公平性・学生支援オフィス」オフィスマネージャー、Terry Gardiner 氏の多大なる協力を承った。

日本の保育・教育における外国につながる子ども、家族の在り方、いろいろな性の認識など多様性理解と受容の必要性の高まりを背景に、それに対応する保育者・教育者の認識と技能もより高度になることを見据え、今回のワークショップの目的は、学生の多様性理解と受容に関する経験値とニーズ把握、そして学習機会の提供である。

多様性理解と受容を保育・教育の観点でどのようにとらえるかは「国によってもその解釈や取り組みは多様であり、それはわが国も同様であるが、ここでは、そういった到達点を踏まえたうえで現代の課題を整理する」という上田・金(2014)のインクルージョンに対する考え方を踏襲した。日本とカナダでは、歴史・人種構成・文化等、多様性を考えるうえで根源的な社会の在り方に大きな違いがある。そのため、ワークショップで使われた教材では、カナダに多様性の理解と尊重は単なる教養のみならず、社会の一員としてまた、保育・教育・福祉に携わる専門職としての必須スキルであるという点を強調しながらも、単純な国間比較ではなく、日本そして保育者・教育者としての自身の課題を明らかにすることを目的とした。

2. ワークショップの内容

(1) 前半：グループの確立から定義の共有まで
多様性について共に語り検討しあうことを目的とする対話型の当該ワークショップでは、時に学生が予期しなかった他参加者からの自己開示や価値観のぶつかり合いが起こることがある。そのためオリジナルのワークショップのイントロダクションを踏襲し、『グループルール』(図1)の確認と共有を最初に行った。この段階では、自己開示が持つリスク・引き起こされる恐怖心をグループとして認識したうえでグループルールを共有した。また、多様なアイデンティティ・文化・ライ

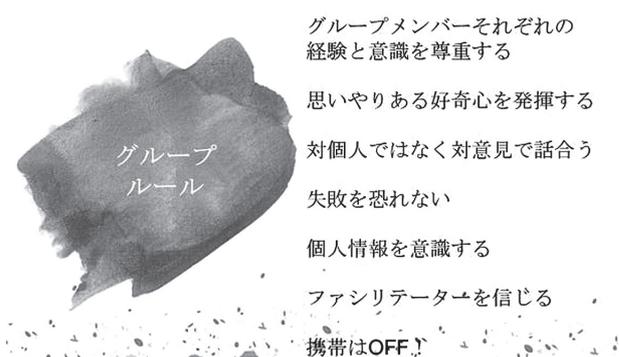


図1 『グループルール』の確認と共有

フスタイルなどを安心して開示するためには「セーフスペース」づくりが不可欠であることを学生に示し実体験することも目指されている。

異なる意見・価値観を交換しあうということにまつわるリスクと難しさを理解する。そして自らの価値観と異なる他者の言動に触れた時に体験する感情反応をどのように生産的に相手に伝えるか、というコンピテンシーを育成する目的も含まれている。

(2) ビデオ：ミニチュアアースプロジェクト

『ミニチュアアースプロジェクト』(図2)は1990年にDonella Meadowsの「State of the Village Report」内で発表された調査結果にもとづいて、71.3億の世界人口を100人の村に置き換えるというコンセプトで制作されたビデオである。グローバルレベルでの富の不平等分配や健康で文化的な最低限度の生活すら望むことのできない人が世界人口に占める割合を身近に感じられる数字



図2 『ミニチュアアースプロジェクト』

出典：The Miniature Earth. 2010 edition. Official version

に置き換えることで、自らが持っているものに対する再認識と感謝を築くことを目的とする。このビデオを視聴後、グループで感想を共有した。

その後、「多様」「インクルージョン」「ノーマライゼーション」という言葉の広辞苑における定義とカナダの辞書における「diversity」「inclusion」「normalization」の定義の違いについて比較をポップコーンディスカッションスタイル（クラス全体に質問を投げかけ、手を挙げた参加者が順に発言する）で話し合った（図3）。

続いて「バリアーは誰がつくるの？」という質問から「平等：equality」、「公平：equity」「革命：liberation」について画像で視覚的なイメージを持ちながら障がいがある市民の社会参加を例に議論を行った（図4）。

またオンタリオ州の人権コードを使い、日本とカナダにおける人権の観点からの多様性の考え方の違いについて、英語を日本語に翻訳するというクラスアクティビティを通して考察を深めた。



図3 言葉の定義の例
出典：Merriam-Webster / 広辞苑無料検索

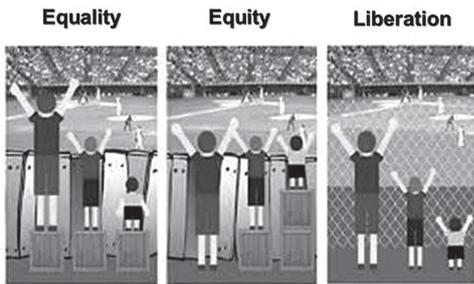


図4 Diversity and Equity Workshop
出典：Diversity and Equity Workshop at FIFSW

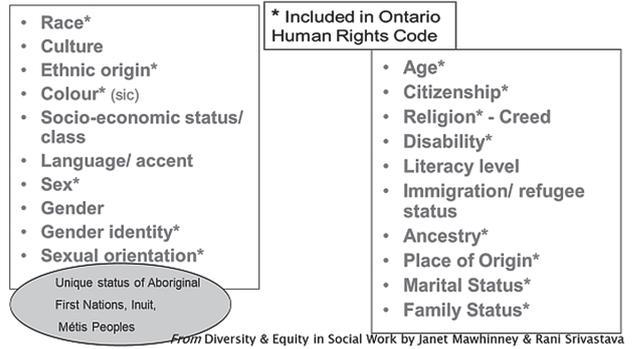


図5 オンタリオ州の人権コード
出典：Diversity & Equity in Social Work by Janet Mawhinney & Rani Srivastava

(2) 後半：自己覚知と多様性理解をつなぐグループアクティビティ

ワークショップの後半ではふたつのアクティビティを通して社会的アイデンティティの自己覚知と多様性に対する認識の確立を目指した。ひとつ目のアクティビティが「Power Flower: 社会的アイデンティティの自己覚知」(図6)である。

1991年に Barb Thomas, Doris Marshall Institute によって発表された参加者が個人そしてグループとして所属する社会の中で普段意識せずに行使することができるパワー（公用語を不自由なく話すこと、健全な体を持つこと、性的多数派に所属すること等）について覚知することを目的とするアクティビティである。また、無意識に行わ

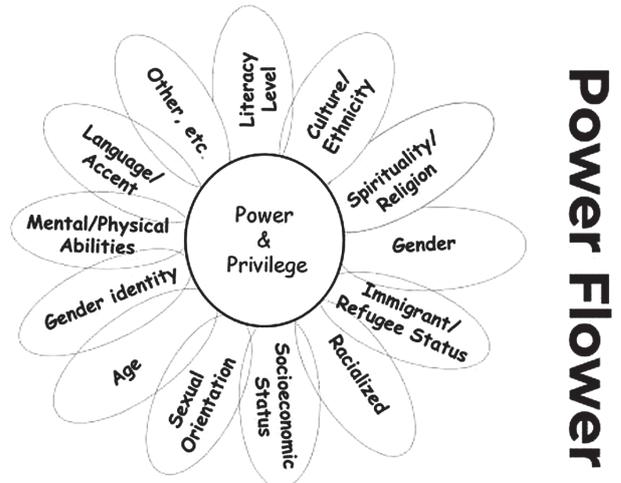


図6 Power Flower
出典：Barb Thomas, Doris Marshall Institute. Adapted from Lee, Letters to Marcia, as cited in Arnold, et. al. (1991)

れる不平等な権利の分配によって、社会の多数派の優位性が維持されていることに参加者の意識を向けることも目的としている。アクティビティ方法は、紙に描かれたフラワーの花びら部分に社会アイデンティティがひとつずつ英語で記載されている。第一段階では、グループ活動として英語を日本語の定義に置き換える。その際に「ethnicity：民族」と「race：人種」、「sexual orientation：性的指向」と「gender identity：性別認識」はどのように異なるか、というような問いに対し、参加者が自分の言葉で説明できるようになることが望まれる。

第二段階では、個人活動として個々の社会アイデンティティに対し自分が社会の多数派もしくはより多くの権利を手に行っている側（男性・健常者・日本語が母語など）にいると思うアイデンティティの花びらではより花びらの中心に近い部分に丸を、自分が少数派もしくは権利を少なく与えられている側（女性・障がいがある・日本語が第二・第三言語など）にいると思うアイデンティティの花びらでは中心から遠い部分に丸を付ける。

このアクティビティでは個人の中に複数の社会的アイデンティティが共存し、時に個人を社会の多数派としてより優位な立場に置き、また、時には特定の集団の中で少数派もしくは抑圧される側に置くということを体感することが目指される。

ふたつ目のアクティビティは「スターバックスアクティビティ」（図7）である。このアクティ

全米初、スターバックスが
聴覚障害者向け店舗をオープン 首都ワシントン



聴覚しようが
いのある店員
の採用に賛成

聴覚しようが
いのある店員
の採用に反対

図7 スターバックスアクティビティ

出典：AFP BB News

ビティでは、スターバックスが聴覚障がいがある顧客をメインに置いた店舗を米ワシントンに開いたことをシナリオ化し、クラスをふたつのグループ：1)「聴覚障がいのある店員の採用に賛成」2)「聴覚障がいのある店員の採用に反対」に分け、3つの異なる立場の意見（スタンプポイント）：1) 聴覚障がいのある店員 2) 健常者の店員 3) 顧客、で「賛成」「反対」それぞれの論点をサポートしディベートを行った。多面的な観点を持つと物事に即座に「良い」「悪い」との判断がつけづらくなる。ひとつのスタンプポイントにとってプラスの要素が、ほかのスタンプポイントに属する人にとってはマイナスになる可能性がある。将来、多数の子ども・保護者のスタンプポイントを念頭に置いて様々な判断を行う保育者・教育者として経験するであろうジレンマを体験学習することを目的とした。

2. フィードバックの考察

ワークショップ後に参加者にコメントシートを渡し、自由記述形式でフィードバックを集めた。120人の参加学生のフィードバックから特に、

- (A) 『日本に対する新しい観点の獲得』
- (B) 『自己覚知 (self-awareness) の獲得』
- (C) 『“すぐに理解できないこと”の受容経験獲得』
- (D) 『他者理解に対する興味獲得』
- (E) 『保育者としての課題感の獲得』

に要点を置き分析を行った（表1）。

『日本に対する新しい観点の獲得』(A)の観点からは国内以外の事例を扱った授業の珍しさ、何気なく使っている英語表現（例 ダイバーシティ、ジェンダー等）を日本語での定義と照らし合わせることを通して日本という国、そしてその中で培われる文化や価値観について客観的に観察する経験を持つことができたことが見受けられた。また、日本で生まれ育ったということが自ら多様性理解にどのような影響を与えているのか、という点、例えば世界から見た際の日本の経済的豊か

表1 ワークショップ後の参加者のコメント

日本に対する新しい観点の獲得 (A)
<p>自分たちは日本というあたり前の世界が豊かな国に住んでいるから自分のことととらえにくい。が、そのこともふまえて私たちは考えていかないといけない。</p> <p>多様性、インクルーシブ、ノーマライズという言葉は授業でたくさん聞いてきましたが、カナダにおける考え方を聞いて、日本との、私の考えていたのと、少し違っているのかなと思いました。</p> <p>自分は、性別、年齢、人種、そんなものは関係ないとは思っていますが、脳が勝手に区別してしまうことがあり、それがとても嫌です。それは多分、日本に生まれ、日本で育ったからこそその価値観があるからだと思います。</p> <p>多様性という言葉に聞きなれない、聞いてしっくりこないのは日本に住んでいるからなのかな、と思いました。</p> <p>このような授業は大学に入ってはじめてで、日本のみならず、世界や政治に向けた内容だった。</p> <p>この広い世界の中には「ちがう」ことが沢山あって、同じことの方が少ないのかもしれない。</p> <p>多様の意味が外国と広辞苑で違うということに驚いた。</p> <p>日本語でのインクルージョンは共に、含んだというニュアンスで使われているように感じていたが、英語では様々な所属があって良いという、日本語より深い次元での言葉ということに感動を覚えました。</p>
自己覚知 (self-awareness) の獲得 (B)
<p>自分の社会的な立ち位置がどこにあるのか詳しく考えることも出来、自分にとってプラスになりました。</p> <p>社会的な視点、国際的な視点から自分はどの位置にいるのかってあまり考えたことなく、難しい内容でした。</p> <p>多様性を考える前に“己を知る”ことが大事、それがスタート地点というのは日本人にはあまりない考え方だと思う。</p> <p>パワーフラワーをやったときに、色々な立場から見て自分はどの位置に行くのかというのをよく考えられました。普段、こういったことを考えないのでよかったなと思いました。</p> <p>カナダだけでなく私自身が生きている世界で、私の知らない環境があることは分かっているかも知っていても、理解できていない世界があることを改めて学ぶことのできる1時間半だったと思います。</p> <p>これから社会に出ていく上で、今回の内容はとても大切なものだったと思ったので、忘れずに、自分を理解することから始めていこうと思いました。</p>
“すぐに理解できないこと”の受容経験の獲得 (C)
<p>今の自分には理解することが難しいことだらけだけど、少しずつそういった所にも目を向けたり、興味を持てるようにしていけたらいいなと思いました。</p> <p>すべて理解したわけではありませんが、今回の講義をきっかけに、じぶんでも調べたり、耳にしたときに、「この前の講義のことだ」と思わせるようになりたいと思います。</p> <p>普段はこのようなことを考えずに生活してしまっているし、自分の周りも同じステイタス(?)の人ばかりなので、なんだか気持ちが辛くなるけど、正直あまりピンとこないし、想像できません。しかし、このような事実を多くの人が認知していて、Power Flowerにふれる機会があれば、変わってくるのではないかなと思いました。</p> <p>今の私では、少し難しくとも考えさせられる内容だったと思う。</p> <p>答えがないことに答えを見出すということは、無意味のように感じて、自分の内面を見つめる、省みるとても意味のある活動になっていることに、この講義の中で強く感じました。</p>
他者理解に対する興味の獲得 (D)
<p>自分のあたり前は他の人たちのあたり前ではないこと、相手の意見を受け入れられるような人になりたいと感じました。</p> <p>人によって様々な言語、価値観、環境、視点があって、とても新鮮だと感じる事ができました。</p> <p>多様性を理解して大事にすること。受け入れることが大切。</p> <p>人が思うあたり前は、それぞれ違うから、自分にとってのあたり前という概念をかためてはいけないなと思いました。</p> <p>今まで考えたことのない、文化や言語能力、経済力までもが社会においてマイナスになることがあるのはとても悲しいと思った。が、そのことについて自分だけでは考えることがなかったと思うので、とても良い機会になった。</p> <p>もっと世界のことも(福祉)を知って行きたいと思ったし、勉強したいと思いました。</p>
保育者としての課題感の獲得 (E)
<p>自分が保育者になった時に、集団ばかり意識する保育者にはなりたくないなと思いました。</p> <p>将来自分の属する場所で、こういう考えを持つことは大切だと気づきました。</p> <p>「家族支援」に対して、考えが変わったというか、考えが深まりました。</p> <p>自分が将来保育者になった時そのような事があるかもと思いました。</p> <p>今、自分が保育士になるために学んでいる支援の技術や知識だけでは、子どもの心によりそえないことがわかった。</p>

さ、また生活の中で主に耳にする言語や出会う人種の単一性など、日常の中で自分と他者の違いを実感する機会の少なさに対する気づきと深い考察が見られた。

『自己覚知 (self-awareness) の獲得』(B)では大学、実習、バイトなどの異なる所属における自らの社会的対場についての考察が見られた。このような自己の社会的立ち位置が他者との関係性にどのように影響をおよぼすか、という点における自己覚知の重要性の認識は日本ではあまりなじみがない、また、このようなことを考える機会が実生活でも教育の場でも少ないという点がフィードバックから明らかになった。

『“すぐに理解できないこと”の受容経験の獲得』(C)においては、今回のワークショップ内容に対し、ピンとこなかった、気持ちが辛くなった、今すぐに理解することは難しい、と回答しながらも、これから自分で調べていきたい、ワークショップ内容を思い出していきたいなど、自らの価値観や人生観内に収まらない体験に対し、短絡的に判断することなく、前向きに受容していく姿勢が見られた。特に「答えがないことに答えを見出すということは、無意味なように感じて、自分の内面を見つめる、省みるとても意味のある活動になっていることに、この講義の中で強く感じました。」という回答からは、自らの世界観を広げていこうという柔軟な向上心を強く感じるころであった。

『他者理解に対する興味の獲得』(D)ではもっと世界のことを知りたい、自分の当り前は他者の当り前ではないという気づき、多様性理解と受容の重要性などについて非常に前向きな意見が多くみられた。

最後に『保育者としての課題感の獲得』(E)では、集団ばかり意識する保育者にはなりたくない、将来自分の属する場所で、こういう考えを持つことは大切だと気づいた、「家族支援」に対し考えが深まった、今学んでいる支援の技術や知識だけでは子どもの心によりそえないことがわかったな

ど、ワークショップで体験した自己覚知と多様性理解を保育者・教育者としての将来につなげての回答が複数見られた。

3. 結論および今後にあたって

今後の日本を担う保育者・教育者養成に置いて多様性理解と受容に関する教育機会の意義はより高まっていくことが予想される。

120人のワークショップ参加学生のフィードバックから浮かび上がったのは、多文化・多様性という言葉や概念を実生活や授業の中で耳にする機会はあっても、「多様性にどう向き合うか」「保育者・教育者としてどのような認識やスキルが必要か」という点に関する具体的な体験型学習や考察の機会は少ない、という学生の体感である。

多文化対応に関して、語学力を高める、書類を多言語化する等の前向きな取り組みを行う保育園、幼稚園や学校が増えてはいる。しかし、多様性とは言葉どおりいろいろ異なる様が多いことであり、単に表面的な語学力やマニュアルづくりでは対応しきれない。その時々、子ども・保護者そして他専門職者と対話し、自ら状況判断できるコンピテンシー（能力）が保育者・教育者に育つことが、多様性を理解・受容する保育と教育の現場をつくっていくためには欠かすことができない。

外国につながる子どもや様々な家族の在り方が増加しているとはいえ、諸外国と比べると実生活の交流により様々な多様性を自然に体験する機会が少ないというのは日本社会の特殊性といえるだろう。だからこそ、今後、保育者・教育者養成課程において多様性理解・受容を実践的なコンピテンシーとして身に着ける機会の必要性はますます高まっていくことが予想される。

なお、今回の分析では、A、B、C、D、Eに要点を置いて分析したが、これは、トロント大学大学院社会福祉学部で用いているプログラムの分析に準じた。これに関しては、分析項目の妥当性等について、例えば、その項目だけでいいのか、

また、それらを獲得できなかった場合の分析やその位置付けも含めた手続き（方法）について、今後、検証が必要だと思われる。

謝辞

ワークショップの実施と本論文作成にあたっては東京未来大学の先生方、トロント大学大学院社会福祉学部学生支援オフィスマネージャー、Terry Gardiner 氏に多大なるご協力を受け賜りました。ここに記し、厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

上田征三・金政玉（2014）『障害者の権利条約とこれからのインクルーシブ教育』東京未来大学研究紀要（Vol.17）P.19-29に掲載
東京未来大学こども心理学部・東京福祉大学教育学部実施「カナダにおける多様性と社会公平性ワークショップ

プ』（2018）学生フィードバック
AFP BB News（2018）Retrieved from <https://www.afpbb.com/articles/-/3194449>（2019.3.14 閲覧）
Arnold, R., Burke, B., James, C. & Martin, D.（1991）*Educating for a Change*, Toronto, ON: Between the Lines
Barb Thomas, Doris Marshall Institute. Adapted from Lee, Letters to Marcia, as cited in Arnold, et. al.（1991）
University of Toronto Factor-Inwentash Faculty of social Work “Equity and Diversity Workshop”（2018）
University of Toronto Factor-Inwentash Faculty of social Work “Diversity & Equity in Social Work by Janet Mawhinney & Rani Srivastava” workshop（2018）
Miniature Earth Project（2010）Retrieved from <http://www.miniature-earth.com/>（2019.3.14 閲覧）
（いちかわ ヴィヴェカ）トロント大学大学院社会福祉学部
（うえだ ゆくみ）東京未来大学こども心理学部

